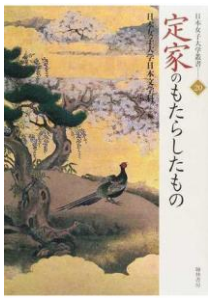
○記入用紙

JWUシーズ

※＝入力必須項目

研究者名※	坂本清恵 Kiyoe Sakamoto	学位※	博士(文学)
所属※	文学部 日本文学科	職名※	教授
連絡先	kiyoe.s@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/read0039347		
研究分野※	日本語学		
研究キーワード※	音声・音韻　表記　日本語史		
共同研究・競争的資金等の研究課題	研究代表 「アクセント体系変化後の文献を中心とした日本語アクセント史研究の総括と展開」基盤研究(C)(2019－2021) 「アクセント体系変化後の定家仮名遣いの研究」基盤研究(C)(2010－2012) 「漢語アクセントの史的研究における基礎データの構築」基盤研究(C)(2006－2007) 「体系変化後の近畿方言アクセントについての研究」奨励研究(A)(1995) 「近世京都・大阪アクセントの比較とアクセント体系変化に関する研究」奨励研究(A)(1993) 研究分担 「デジタル・アーカイブを活用した最盛期義太夫節浄瑠璃作品の総合的研究」基盤研究(B)(2019、2020) 「長唄の旋律形成に関する学際的研究」基盤研究(C)(2017－2021) 「言語音声産出における構音運動の相互調整に関する通言語的研究」基盤研究(C)(2017－2020) 「近松没後義太夫節浄瑠璃作品のデジタル・アーカイブを利用した包括的研究」基盤研究(B)(2016－2019) 「『源氏物語』古注釈の展開と平安文学の受容に関する基礎的研究」基盤研究(C)(2016－2019) 「文献による日本語アクセント史研究の総括と展開」基盤研究(C)(2016－2018) 「蝋管等初期録音資料群の音源保存、音声復元、内容分析、情報共有に関する横断的研究」基盤研究(A)(2013－2016) 「享保以降義太夫節浄瑠璃作品のデジタル・アーカイブ化に向けての研究」基盤研究(B)(2012－2016) 「蝋管を中心とした初期録音資料の音源保存・音声復元・内容分析に関する横断的研究」基盤研究(A)(2009－2012) 「漢語アクセントの解明と資料の発掘」基盤研究(C)(2009－2011) 「未翻刻浄瑠璃本の網羅的調査・翻刻と複次的活用・公開に向けての基礎的研究」基盤研究(B)(2008－2011) 「蝋管等の録音資料からの音声復元と内容情報の分析に関する横断的研究」基盤研究(A)(2006－2008)		
社会貢献・産学官連携活動等	日本音声学会評議員 日本実務教育学会副会長 文京アカデミー専門委員 女性のためのリカレント教育推進協議会会長 東京商工会議所　教育・人材育成委員会学識委員 文部科学省大学等におけるリカレント講座の持続可能な運営モデルの構築事業　有識者委員 プランインターナショナルジャパン主催「日本で女性のリーダーが育つためには？教育が果たす役割を考える」シンポジウム(2021年6月17日) 私情協イノベーション大会「日本女子大学「リカレント教育課程」の状況と展望」講演(2021年9月7日) 愛知県教育委員会主催「社会人の学びとは　大学等高等教育機関の役割とは」(2021年11月24日)		
受賞歴	窪田空穂賞受賞		

研究領域	日本語学:日本語史・音声音韻・表記	(SDGs)
研究テーマ※	日本語音韻史・表記史の研究	

概要※ （概ね1000字以内） （写真・グラフ等自由）	【研究の背景・目的・内容】 日本語のアクセント史、音韻史の解明をするために、「定家仮名遣いに関わる研究」と「伝統芸能資料による音韻史研究」を中核に据えた研究を行っている。 「定家仮名遣い」については、アクセントを利用した仮名遣いの淵源はどこにあるのか、いつまで原理どおりに行われたのか、どのように広がったのかを追求している。また、「伝統芸能資料による研究」については、能楽資料と、近世音曲を中心とした音韻史研究を行っている。 【応用例、研究の展望】 「定家仮名遣い」については、御子左家歴世の俊成、定家、為家、為相の仮名の用字法と仮名遣いを明らかにしするとともに、定家様といわれる書体と仮名遣いの関係、さらに仮名の用字法の関係を明らかにする。定家様による定家仮名遣いの書写物が、必ずしも定家校訂本文系統ではないこともある。アクセント仮名遣いが批判されたのちも、著者自身のアクセントによる仮名遣いが『仙源抄』以外にもあるかどうかを探求していく。  「伝統芸能資料による研究」については、中世芸能である能楽と、近世音曲である義太夫節、長唄について音声に関わる伝承がどうのように譜本に残っているのか、現代の演奏に受け継がれてきたのかを解明中である。 謡については、明和改正謡本に伝承の転換点があり、これが国学の隆盛との影響関係があることが分かってきた。 近世音曲については、未翻刻義太夫節正本の翻刻刊行を続けながら、義太夫節におけるアクセントをはじめとする音声が、いかに位相差を表す表現に使用されて来たのかなどを探っている。長唄については、謡を摂取した長唄について音楽学からの研究者とともに研究会を重ねている。 【研究方法の特色】 定家仮名遣い、伝統芸能資料をした研究は、日本語学だけでなく、文学研究、音楽研究などの学際的な視座からの取り組みが必要であり、それぞれの研究者とのコラボレーションが行えるよう、共同研究や、学術交流企画により、意見交換を行っている。
本研究関連 特許・論文等	・『定家のもたらしたもの』翰林書房　2018年 ・「アクセント仮名遣いの淵源」『訓点語と訓点資料』146号（2021年3月） ・「御子左家歴世と仮名用法 ： 俊成・定家・為家そして為相」『日本文学研究ジャーナル』16（2020年12月） ・「長唄正本の胡麻章」『論集』16号（2020年12月） ・「近松作浄瑠璃に仕組まれた音韻表現 ： 動詞の活用と音便」『歌舞伎 ： 研究と批評』61（2018年9月）
共同研究・外部機関との連携への期待	・2022年度以降は、以下の共同研究を行う予定である。 東京学芸大学黒石陽子研究代表「デジタル・アーカイブの拡充と発展的活用に向けた最盛期義太夫節浄瑠璃作品の研究」 文教学院大学鈴木豊氏研究代表「文献アクセント史研究の総合的再検証と展開」 日本女子大学配川美加研究代表「能楽・地歌・河東節を摂取した長唄の旋律形成に関する発展的研究」 日本女子大学吉田健二研究代表「名古屋都市圏の言語実態一首都圏との対照」 日本女子大学尾中文哉研究代表「リカレント教育修了者のライフキャリア形成促進政策に関する研究:女性活躍を中心に」